

庭の追憶

寺田寅彦

青空文庫

郷里の家を貸してあるT氏からはがきが来た。平生あまり文通をしていないこの人から珍しい書信なので、どんな用かと思つて読んでみると、

郷里の画家の藤田^{ふじた}という人が、筆者の旧宅すなわち現在T氏の住んでいる屋敷の庭の紅葉を写生した油絵が他の一点とともに目下上野^{うえの}で開催中の国展に出品されているはずだから、暇があつたら一度見に行つたらどうか。

という親切な知らせであつた。さつそく出かけて行つて見たら、たいして捜すまでもなくすぐに第二室でその絵に出くわした。これだとわかつた時にはちよつと不思議な気がした。それはたとえば何十年も会わなかつた少年時代の友だちにでも引き合わされるようなものであつた。

「秋庭」という題で相当な大^{たい}幅^{ふく}である。ほとんど一面に朱と黄の色彩が横^{おう}溢^{いつ}して見るもまぶしいくらいなので、一見しただけではすぐにこれが自分の昔なじみの庭だというところのみ込めなかつた。しかし、少し見ているうちに、まず一番に目についたのは、画面の中央の下方にある一枚の長方形の飛び石であつた。

この石は、もとどこかの石橋に使つてあつたものを父が掘り出して来て、そうして、こ

の位置にすえたものである。それは自分が物ごころついてから後のことであつた。この石の中ほどにたしか少しくぼんだところがあつて、それによく雨水や打ち水がたまって空の光を照り返していたような記憶がある。しかし、ことによるとそれは、この石の隣にある片麻岩へんまがんの飛び石だったかもしれない。それほどにもう自分の記憶がうすれているのはわびしいことである。

この絵でも、この長方形の飛び石の上に盆栽が一つと水盤が一つと並べておいてあるのがすっかり昔のままであるような気がするが、しかしこの盆栽も水盤も昔のものがそのまま残っているはずはない。それだのに不思議な錯覚でそれが二十年も昔と寸分ちがわないうような気がするのである。

この飛び石のすぐわきに、もとは細長い楠くすの木が一本あつた。それはどこかの山から取つて来た熊笹くまざさだか藪柑子やぶこうじだかといつしよに偶然くつついて運ばれて来た小さな芽ばえがだんだんに自然に生長したものである。はじめはほんの一二寸であつたものが、一二尺になり、四五尺になり、後にはとうとう座敷のひさしよりも高くなつてしまった。庭の平へ坦いたんな部分のまん中にそれが旗ざおのように立っているのがどうも少し唐突なように思われたが、しかし植物をまるで動物と同じように思つて愛護した父は、それを切ることはも

ちろん移植しようとしなかったのであった。しかし父の死後に家族全部が東京へ引き移り、旧宅を人に貸すようになってからいつのまにかこの楠は切られてしまった。それでこの「秋庭」の画面にはそれが見えないのは当然である。しかしそれが妙に物足りなくもさびしくも思われるのであった。

次に目についたのは画面の右のはずれにある石燈籠である。夏の夕方には、きまつて打ち水のあまりがこの石燈籠の笠に注ぎかけられた。石にさびをつけるためだという話であった。それからまた低気圧が来て風が激しくなりそうだと夜中でもかまわず父は合羽を着て下男と二人で、この石燈籠のわきにあった数本の大きな梧桐を細引きで縛り合わせた。それは木が揺れてこの石燈籠を倒すのを恐れたからである。この梧桐は画面の外にあるか、それとももうとうの昔になくなっていくかもしれない。

画面の左上のほうに枝の曲がりくねった闊葉樹がある。この枝ぶりを見ていると古い記憶がはつきりとよみがえって来て、それが櫛の木だとわかる。ちょうど今ごろ五月の節句のかしわ餅をつくるのにこの葉を採って来てそうしてきれいに洗い上げたのを笹にっぱい入れ、それを一枚一枚取っては餅を包んだことをかなりリアルに思い出すことができる。餡入りの餅のほかいろいろな形をした素焼きの型に詰め込んだ米の粉のペーストを

やはり櫨の葉にのせて、それをふかしたのの上にくちなしを溶かした黄絵の具で染めたものである。

正面の築^{つきやま}山の頂上には自分の幼少のころは丹波栗^{たんばぐり}の太木があつたが、自分の生長するにつれて反比例にこの木は老衰し枯死して行つた。この絵で見ると築山の植え込みではつつじだけ昔のがそのまま残っているらしい。しかし絵の主題になっている紅葉は自分にとってはむしろ非常に珍しいものである。

たぶん自分の中学時代、それもよほど後のほうかと思うところに、父が東京の友人に頼んで「大杯」という種類の^{かえで}楓の苗木をたくさんに取り寄せ、それを邸内のあちこちに植えつけた。自分が高等学校入学とともに郷里を離れ、そうして夏休みに帰省して見るたびに、目立ってそれが大きくなっているのであつた。しかし肝心のもみじ時にはいつでも国にいないので、ついぞ一度もその霜に飽きた盛りの色を見る機会はなかつたのである。大学の二年から三年にあがつた夏休みの帰省中に病を得て一年間休学したが、その期間にもずつと須崎^{すさき}の浜へ転地していたために紅葉の盛りは見そこなつた。冬初めに偶然ちよつと帰宅したときに、もうほとんど散つてしまつたあとに、わずかに散り残つて暗紅色に縮み上がった紅葉が、庭の木立ちを点綴^{てんてつ}しているのを見て、それでもやっぱり美しいと思つたこ

とがあつた。それつきり、ついぞ一度も自分の庭の紅葉というものを見たことがなかつたのである。それをかれこれ三十年後の今日思いもかけぬ東京の上野うえのの美術館の壁面にかかつた額縁の中に見いだしたわけである。

生まれる前に別れたわが子に三十年後にはじめてめぐり会つた人があつたとしたら、どんな心持ちがするものか、それは想像はできないが、それといくらか似たものではないかと思われるような不思議な心持ちをいだいてこの絵の前に立ち尽くすのであつた。

次男が生まれて四十日目に西洋へ留学に出かけ、二年半の後に帰省したときのことである。船がさんばし棧橋へ着いたら家族や親類がおおぜい迎えに来ていた。姉が見知らぬ子供をおぶつてゐるから、これはだれかと聞いたらみんなが笑いだした。それが紛れもない自分の子供であつたのである。それがそうだと聞かされると同時に三年前の赤ん坊の顔と東京の原町はらまちの生活が実に電光のように脳裏にひらめいたのであつた。

この絵に対する今の自分の心持ちがやはりいくらかこれに似ている。はじめ見た瞬間にはアイデンチファイすることのできなかつた昔のわが家の庭が次第次第に、狂つていたレインズの焦点の合つてくるように歴然と眼前に出現してくるのである。

このただ一枚の飛び石の面にだけでも、ほとんど数え切れない喜怒哀楽さまざまの追憶

の場面を映し出すことができる。夏休みに帰省している間は毎晩のように座敷の縁側に腰をかけて、蒸し暑い夕なぎの夜の茂みから襲ってくる蚊を団扇うちわで追いながら、両親を相手にいろいろの話をした。そのときにいつも目の前の夕やみの庭のまん中に薄白く見えていたのがこの長方形の花崗岩かこうがんの飛び石であった。

ことにありあり思い出されるのは同じ縁側に黙って腰をかけていた、当時はまだうら若い浴衣姿ゆかたすがたの、今はとくの昔になき妻の事でもある。

飛び石のそばに突とつ兀くすとしてそびえた楠くすの木のかずえに雨気を帯びた大きな星が一ついつもいつもかかっていたような気がするが、それも全くもう夢のような記憶である。そのころのそうした記憶と切っても切れないように結びついてるわが父も母も妻も下女も下男も、みんなもう、一人もこの世には残っていないのである。

国展の会場をざっとひと回りして歸りに、もう一ぺんこの「秋庭」の絵の前に立つて「若き日の追憶」に暇いとま請こいをした。会場を出るとさわやかな初夏の風が上野うえのの森の若葉を渡つて、今さらのように生きていることの喜びをしみじみと人の胸に吹き込むように思われた。去年の若葉がことしの若葉によみがえるように一人の人間の過去はその人の追憶の中にはいつまでも昔のままによみがえつて来るのである。しかし自分が死ねば自分の過

去も死ぬと同時に全世界の若葉も紅葉も、もう自分には帰って来ない。それでもまだしばらくの間は生き残った肉親の人々の追憶の中にかすかな残^{ナハビルト}像のようになって明滅するかもしれない。死んだ自分を人の心の追憶の中によみがえらせたいという欲望がなくなれば世界じゅうの芸術は半分以上なくなるかもしれない。自分にしても恥さらしの随筆などは書かないかもしれない。

こんなよしなしごとを考えながら、ぶらぶらと山下^{やました}のほうへおりて行くのであった。

（昭和九年六月、心境）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第四卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

庭の追憶

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>